

聖書：ヨシュア記6章12～27節

説教題：約束のとおり

1 六日間の猶予

今日の箇所を読み、皆さんはどう思われたでしょうか。まるで民族大虐殺のようなことが神の命令によって行われている。そう感じてとまどったのではないのでしょうか。神はいったい何をされようとしたのか。これから一つ一つ確認していきます。

高い城壁に囲まれているエリコは、イスラエルの襲撃に備え、堅く門を閉じています。そこでヨシュアがまずしたことは、祭司たちが角笛を吹き鳴らしながら契約の箱とともに城壁の周りを一日に一度だけ周り、それを六日間繰り返すということでした。その目的については申命記20章10節に説明があります。「町を攻略しようと、あなたがその町に近づいたときには、まず降伏を勧めなさい。」

主はエリコをさばく前に、六日間猶予を与えて降伏するようにと勧めていたことをまず覚えたいと思います。

2 聖絶

しかし、エリコは頑なに応じようとはしません。とうとう七日目の朝になり、ヨシュアはこのように言います。16, 17節。「ときの声をあげなさい。主がこの町をあなたがたに与えてくださったからだ。この町と町の中のすべての者をもの、主のために聖絶しなさい。ただし遊女ラハブと、その家に共にいる者たちは、すべて生かしておかなければならない。あの女は私たちの送った使者たちをかくまってくれたから。」

ここに「聖絶」という聞き慣れないことばが出て来ます。「徹底的に滅ぼし尽くす」というような意味で使われます。この「聖絶」のことについては、出エジプト記22章20節に説明があります。「ただし主ひとりのほかに、ほかの神々にいけにえをささげる者は聖絶しなければならない。」そこだけ読むと、聖書の神はご自分に逆らう者に対して情け容赦なく怒りをむき出しにされる方なのかと、恐ろしく感じるかもしれません。でもすぐ次の所にはこのように書かれています。「在留異国人を苦しめてはならない。しいたげてはならない。あなたがたも、かつてはエジプトの国で、在留異国人であったからである。すべてのやもめ、またみなしごを悩ませてはならない。もしあなたがた彼らをひどく悩ませ、彼らがわたしに向かって切に叫ぶなら、わたしは必ず彼らの叫びを聞き入れる。」

主は、弱い者が不当に苦しんでいるのを黙って見ておられません。しいたげられている者が泣き悲しんでいるのをご覧になり、苦しめる者に向かって怒りを燃やします。「聖絶」とは、そのような神の御思いと密接につながっているのです。

先日、水俣病の認定基準について裁判所で判決が出ました。あの記事を読み、理不尽な思いをしながら苦しんでいる人たちが沢山いることを改めて知らされました。工場から流された有機水銀が原因で水俣病にされてしまいました。彼らは被害者なのです。それ

なのに、地域から差別され、病気がうつると偏見の目で見られ、国からは切り捨てられ、門前払いされてきました。それを見たとき、多くの方々は大切な正義が踏みにじられているように感じます。こんなことがまかり通っていることに怒りを覚えます。神に似せられて創られた私たちが怒りを感じるのなら、主も同じではないですか。いやそれ以上の方です。

いつぼう、正義が踏みにじられているのに、もし主が何もされない、神はにこにこしているだけならどうなるか。親しみやすい神かもしれない。でもそうになると、強くてずるがしこい者が力で生きる世界になります。そんな世界で生きたいと思いますか。だれも思わないでしょう。

こうしてみると、さばきがあるかないかは、私たちのいのちに関わるほど切実なことだとわかります。ですから「聖絶」と聞いて驚いてはなりません。私たちの希望につながっているのです。

3 ラハブ

(1) 誓い

それでも神は恐ろしいと感じるでしょうか。神の怒りに触れたら生き延びることはできないと思うでしょうか。いいえ。神のさばきから救われる者がいたと聖書は書いています。だれか。ラハブと呼ばれる女性とその家族、親族一同です。

なぜこの人たちが救われたのか。ヨシュアはエリコを攻める前にふたりの斥候をエリコに侵入させます。ふたりはエリコ警察に気づかれ追われるのですが、ラハブがいのちをかけて自分の家にかくまいました。そのとき、ラハブは意を決してイスラエルの神に救い

を求めてこうきり出すのです。2章12節。「どうか、私があなたがたに真実を尽くしたように、あなたがたもまた私の父の家に真実を尽くすと、今、主にかけて私に誓ってください。そして、私に確かな証拠を見せてください。」そう言って、自分と自分の家族を救ってくださるように願いました。ふたりの斥候はラハブの願いを聞き、必ず救い出すと誓いました。ヨシュアはその誓いを忘れてはいません。必ずあの誓いを果たさなければならないと心に決めています。

(2) 「遊女」

さて、ここでヨシュアがラハブのことを呼ぶときに、なんとやっているか注意してください。22節。「遊女」とはつきり言っています。これはどういうことでしょうか。

福音書には、イエスが遊女や取税人たちと一緒に食事をされたのを知ってパリサイ人や律法学者たちが怒る場面が出て来ます。それほど忌みきらわれていた職業でした。ヨシュアはラハブの職業を軽蔑してわざとこのように言うのでしょうか。そんなはずはないでしょう。ヨシュアは、ある意図を持ってあえてラハブの職業を強調していると考えられます。

エリコがイスラエルの神のさばきを受けたとき、いったいだれが救われたのでしょうか。身分の高い人でしたか。有名な人でしたか。成功した人でしたか。努力した人でしたか。その反対です。世間から軽蔑の目で見られていた女性でした。こんな女は救われるはずがないとだれもが思っていた人でした。みずから進んで就いた職業ではなかったはず。いつかこの生活から足を洗いたいと願っていました。でも、自分の力ではどうす

ることもできないと悲しんでいました。そんな人が、イスラエルの神のことを耳にし、この神ならば自分を救ってくれるのではないかと望みを託すのです。いのちをかけてふたりの斥候をかくまいました。そんな人が救われます。それも、救われたのはひとりではない。驚くべきことにラハブの家族と親戚一同が全員救われます。

神は、ラハブがエリコの町の片隅で祈っていた救いの祈りと願いに耳を傾けます。小さな祈りを無視する方ではありません。ラハブを救わなければと決心されます。ヨシュアは、このさばきの日にだれが救われるのかはつきりと宣言します。「人々から見捨てられていた女、遊女ラハブが救われていくのをはつきりと見なさい。」

4 さばきと救い

(1) どこから救われたのか

今日の箇所から、二つのことを教えられます。一つ目は、私たちはいったいどこから救われたのか、です。私たちは口で「救われた」となにげなく言っております。いったいどこから救われたのでしょうか。エリコの町を見てください。彼らは神に逆らい「聖絶」されました。恐ろしいと思いませんか。もしかして自分もあなるだろうかと恐れましたか。安心してください。私たちは神のさばきの剣からすでに救われております。それが一つ目です。

(2) どのように救われたのか

二つ目。ではいったいどのようにして私たちは救われたのでしょうか。よい人間だったからですか。努力したからですか。逆でしょう。ヨシュアは「遊女ラハブ」を救わなければな

らないとこだわりました。私たちも神の目から見るなら「遊女」なのです。罪にまみれた者なのです。おまえなど救う価値はない。そう言われてもおかしくない存在です。それなのになぜ救われたのですか。主がアブラハムに誓った契約があるからです。主イエス・キリストが新しい契約となられ、十字架で血を流され、そのみからだをささげてくださいましたから。私が信じると言う前から主は救いの道を開いておられたから。あるとき、主が角笛を吹いてくださり、主の救いの御手をつかみなさいと声をかけてくださいました。その十字架の贖いを私たちは、ただ信じただけ。それで救われました。

私たちはかつてラハブのように歩んでいた者ではなかったですか。ラハブのように暗くて薄暗い部屋の中で、涙を流しながら悲しんでいた者ではなかったですか。

主は私たちのちっぽけと思える信仰に応えようとされます。それも自分ひとりが救われるものではありません。ラハブを救った神は、ラハブの家族も救いました。同じことがどうして私たちに起きないのでしょうか。同じことが起きるのです。そう考えると、私たちの信仰がもたらす影響は、私たちの想像をはるかに超えて広がっていることに気がつくはずですよ。

主ご自身が犠牲となられて、さばきから救い出してください。救いのみわざに感謝いたします。